

平成30年度 産業建設委員会視察報告

1. エフオン白川 木質バイオマス発電について(福島県白河市)

片丘に計画する木質バイオマス発電所の参考にするため視察研修に訪問した。この会社は、平成31年運転開始の施設を含めて全国に4カ所のバイオマス発電所を展開し、発電出力は4カ所合計で59,500kwの企業で、今回の研修施設は、平成18年10月に運転を開始した施設で、発電出力は11,500kwの木質バイオマス発電所で、片丘の施設に参考となるものと視察場所に選定した。

この発電所は、・100%木質チップを使用して発電・年間設備利用率90%を達成・震災後1週間で再稼働・燃料調達から設備管理まで自社グループで管理している施設で、燃料は年間約12万tを毎日40~50台の10t車で自社工場でチップ化した燃料を運びこんでいる。

施設に到着後、発電所の概要説明用ビデオを約10分鑑賞した後、燃料サイロ(貯蔵量700t)、ボイラー棟(内部循環流動床式ボイラー)、蒸気タービン・発電機棟(発電電圧6,600V)送電設備(電圧を66,000Vに変圧後、東北電力送電線へ送出す)等の場内見学を担当者から設備の内容等の説明を聞きながら約30分視察が出来たことは、片丘のバイオマス発電所の内容を知るためにも大きな研修となった。



2. 震災後の復興について(宮城県気仙沼市)

平成23年3月11日に発生した東日本大震災により大きな被災を受けた気仙沼

市の復興の状況と、災害発生時とその後の議会対応についての視察に訪問した。

地震発生時は、2月定例会予算審査特別委員会開会中で各議員は地元に戻り情報収集を行うため委員会を閉会とし、3日後に流会を防ぐため再開し過半数の賛成で議決し定例会を閉会とした。

その後、調査特別委員会の設置、議員報酬の減額、災害復旧に係る予算専決処分、気仙沼市震災復興計画を可決するなど、議会として毎月定例的に特別委員会を開催し、平成28年4月には、議会版震災対策マニュアルを作成することが出来た。

この地震による被害状況等は平成30年8月末現在で、死者1,042名、行方不明者215名被災家屋は全壊と一部損壊まで含めて26,124棟(気仙沼市全体家屋数の40.9%被災)、津波浸水面積18.65km²(気仙沼市面積の5.6%)等の被害を受け、震災後7年を経過した時点での人口は、震災前と比較し10,131人が減少したとの説明があった。



その後、市内の被災箇所を議会事務局の案内で視察して回った。

応急仮設住宅に現在も住む方や防災集団移転住宅や、港湾の被災状況及び地震による地盤沈下の影響による住宅再建に関する土地や道路復旧に関する盛り土が盛んに行われている状況を視察できたが、

想像を絶する被災状況とそれに立ち向かう姿勢の素晴らしさに感動を覚える研修であった。

3. 道の駅ろまんちっく村と行政との係わりについて(栃木県宇都宮市)

宇都宮市市政施行100周年記念・農政事業の一環として農林業の振興、地域の

活性化、市民の余暇活動の充実を目的に事業化され、1996年9月に開園し、その後2012年9月にリニューアルオープンした施設で、行政との係わりについて視察に訪問した。

この道の駅は、軽井沢町出身の松本 謙氏が社長を務める「ファーマーズ・フォレスト」が指定管理者として選定され運営している施設で、いちご摘みやラベンダー摘みなど、年間を通して農産物の収穫体験イベントが催され、また入園料が無料であることや1,000台を超える無料駐車場を有し、道路アクセスが良いことも手伝って、開園以来、毎年100万人前後の入場者がある。

園内は主に農園施設と農産物の物販施設で構成されるが、レジャー施設として温泉施設が併設されるほか、オリジナルの「地ビール」や「宇都宮餃子」、「地ビールソフトクリーム」なども販売され、これらを目的とする利用者も多く、ファーマーズフォレストによる斬新な運営構造改革により、収支は大幅に改善され入場者数も増加に転じ、好調に推移している施設で、その規模の大きさと営業の仕方や市内の農業経営者との結びつきなどスケールの大きさは驚くほどの研修であった。

